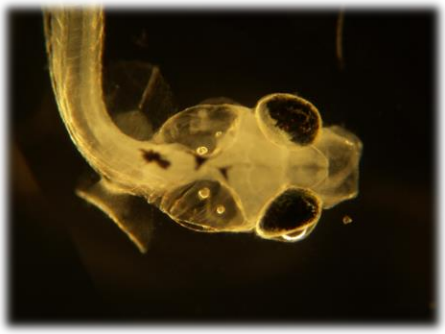
岐阜県水産研究所の広報誌

第53号　2024年1月

水産研だより

【今回の内容】

1　対面による外国人研修を再開しました
2　環境DNA分析を開始しました
3　郡上市白鳥町にあった与太郎淵



仔アユの頭部のアップ
耳石まではっきり見えます

1　対面による外国人研修を再開しました

岐阜県では2016年から外国人研修生の受け入れを開始し、2019年までの間に34カ国、144名の外国人研修生を受け入れました。

しかし、2020年になると新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を受け、研修生の受け入れを中止せざるを得ませんでした。2021年及び2022年は、引き続き対面での研修は行いませんでしたが、(独)国際協力機構(JICA)の実施するWEB研修に協力し、研修の一部を当研究所で行いました。

2023年は新型コロナウイルス感染症の水際対策が緩和されたことを受け、対面による研修を再開しました。

まず、2023年6月から7月にかけて実施された、JICAの小規模内水面養殖研修に協力することとなり、6月20日から23日の4日間を当研究所で研修を実施しました。

この研修には、ベナン、カメールーン、コートジボワール、ガーナ、ジャマイカ、モザンビーク、パプアニューギニア、フィリピン、南スーダン、トーゴの10カ国から、各国の政府系職員各1名(合計10名)が研修生として参加しました。

研修室での講義

ナマズの精子の培養実習

PCR検査(デモンストレーション)

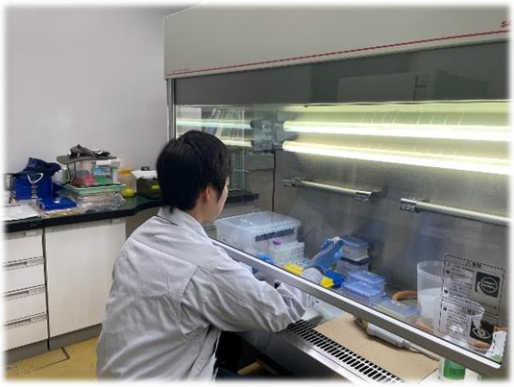
具体的な研修内容は、研究所の業務と岐阜県の水産業の概要、魚病診断や養魚場の水質管理、ナマズの養殖技術等に関する講義と魚病診断(DNA抽出とPCR検査のデモンストレーション)やナマズ精子の培養の実習、さらに県内養殖場の視察等を行いました。また、当研究所の担当部分の最終日には総合討議を行い、研修で行った講義や視察に関する質疑だけでなく、研究所の運営、自動給餌機等の養殖資機材、水産業に関する統計調査等について、熱心な質疑や意見交換が行われました。

(漁業研修部　武藤)

2　環境DNA分析を開始しました

岐阜県では特定外来生物であるコクチバスの駆除を進めています。コクチバスが県内のどこに生息しているのかを明らかにするため、水産研究所では環境DNA分析を開始しました。

水生生物は体表の粘液や排泄物を環境中に放出するため、水中にはその生物由来のDNAを含んだ組織片や細胞が存在しています。環境DNA分析では、川や池の水を採取し、そこに含まれる目的種のDNAを検出します。



環境DNA分析（qPCR）

この環境DNA分析を従来の目視調査や釣獲調査と併用することで、コクチバスを発見できる確率が上がることが期待でき、特に立ち入りや目視調査が困難な場所など、従来の調査方法では見落としがちな調査地点において特に有効と考えられます。一方、コクチバスが周辺に生息していても、水温・水流・濁り等の環境条件によっては環境DNA分析で検出できない場合もあるため、環境DNA分析の結果で不検出だからといって、絶対に生息していないと言い切れるものではありません。今後はコクチバスに限らず、他魚種での活用も視野に入れ、研究に役立てたいと考えています。

（試験研究部　加藤）

3　郡上市白鳥町にあった与太郎淵

与太郎淵は郡上市白鳥町歩岐島地区にあった池で、古くはコイ科フナ属の体色変異個体であるヒブナ（緋鮒）の生息域として知られていました。

与太郎淵は1956年に埋め立てられ、現存していません。与太郎淵の実態についてはほとんど知られていませんでしたが、近年、戦前の文献や地籍図などの情報からその位置や形状が明らかになりました（岸, 2022）。

与太郎淵の埋め立てから70年近く経過した現在、跡地は資材置場になっています。もう池の痕跡すら残っていませんが、かつてここに与太郎淵が存在していたことはせめて記憶しておきたいものです。跡地の近くには「与太郎さま」と呼ばれる祠が地元の人々の手によってまつられており、与太郎の名を今に伝えています。

与太郎淵があったあたり

与太郎さま（過去の文献では与太郎神社または不動様と記されている）

参考文献
岸 大弼. 2022. 現存しない与太郎淵（岐阜県）におけるヒブナの記録. 人と自然, 32: 89-97.

（下呂支所　岸）

発行
岐阜県水産研究所
ホームページ　https://www.fish.rd.pref.gifu.lg.jp/
「岐水研」「ぎふすいけん」で検索
試験研究部・漁業研修部　〒501-6021 各務原市川島笠田町官有地無番地　TEL：0586-89-6351　FAX：0586-89-6365
下呂支所　〒509-2592 下呂市萩原町羽根2605-1　TEL：0576-52-3111（代）　FAX：0576-52-4354